

Cure to Care

第 8 話

與儀 達朗

【登場人物】第8話

*第1〜7話までの鈴木舞の30歳という年齢表記は誤りで、32歳が正しい。

町田 翼（32）（18）： 救急・訪問診

療医

鈴木 舞（32）（18）： 訪問看護師

村井 正和（50）： 訪問診療所院長

五十嵐 隼人（28）： 訪問診療所アシスタ

ント

金城 恵（36）： 訪問診療所アシスタント

山崎 香織（55）： 居宅ケアマネージャー

鈴木 健（52）： 外科部長、鈴木舞の父

八木 直久（50）： 救命センター部長

我那覇 さくら（28）： 有料老人ホーム花

の看護師

石原 翔（37）（23）： 外科医

新井 亮（29）： 町田の後輩の救急医

高井 玲奈（30）： 救命センター看護師

鈴木 真由（50）： 鈴木舞の母

那須 輝武（65）：謎の男

木村 フミ（90）：施設患者

有銘 清（90）：居宅患者

有銘 豪（70）：清の息子

岡本 吾郎（85）：居宅患者

岡本 五倫（55）：吾郎の息子

大塚（22）：バトミントンサークル部員

古賀（20）：バトミントンサークル部員

大城（40）：外科病棟看護師

黒木（30）：救急隊員

皆川（40）：携帯ショップ店員

光浦（35）：集中治療室看護師

外科医 A（36）：外科部長鈴木の部下

外科医 B（34）：外科部長鈴木の部下

救急隊員 A（28）：救急隊員

医師 A（26）：救命センター研修医

車の運転手（55）：携帯ショップ利用者

【あらすじ】（第8話）

町田はサークルの先輩だった石原から言われた言葉に引っかかりながら、訪問診療の業務をこなしていた。ある日、町田が主治医の患者が救急搬送される。事前に設定されていた治療コードとは異なった侵襲的な治療を患者に施す石原。町田は、患者が回復して元の生活に戻っていく姿を目の当たりにし、鈴木健の多職種カンファレンスでは自身の考えを石原に一蹴されてしまう。自信をなくしている町田に村井は、患者の人生で医療を決める時は、必ずやってくることを伝える。

第8話 「試練」

(回想はじめ 14年前) ○体育館・フロア
バトミントンコート周辺に集まって
いる鈴木舞(18)、大塚(22)、
古賀(20)。他にも十名ほどの男女
がコートを取り囲んでいる。体育館の
壁には黒板が立て掛かっており、『ト
ーナメント戦』と書かれている。

大塚「翔先輩、サークル入ってから誰にも負
けてないって、すごくない？」

古賀「すごすぎですよ。そういえば今回の
決勝に勝ち上がってきたのって舞の同期で
しょ？」

舞「そうですね……」

バトミントンのネットを挟んで、石原
翔(32)、町田翼(18)が立って
握手をしている。笑みを浮かべる石原。

石原「まさか、決勝の相手が1年生のルーキ
ーだとはね」

少し緊張した表情で、石原の顔を見る

町田。

町田「一応、中高やっていたんで……よろしくお願ひします」

石原「よろしく、良い試合にしよう」

（回想終わり）

○有料老人ホーム花・個室

ベッドの上に座っている木村フミ（9

0）の聴診をしている町田翼（32）。

町田が聴診を終え、木村の顔を見る。

我那覇さくら（28）が部屋の扉の付

近に立っている。

町田「フミさん、肺や心臓の音は特に問題は

ありませんね」

金城恵（36）が血圧手帳を町田に見せる。

町田「ただ、最近少し血圧が高めですね。何

か生活変わりましたか？」

フミ「特に変わっていないよ」

我那覇「フミさんがよく他の利用者からおや

つもらっているの見ていますよ」

我那覇が笑っている。

フミ「バレていたのね：だってここのおやつ

美味しいんだもん」

フミが町田の方を見る。

フミ「ねえ、先生。見逃してくれない？」

町田「フミさん、食べることにレクが生きが

いって言うていましたね。まあ食べすぎだ

けには注意して、レクも無理ない範囲で楽

しんでくださいね」

町田が優しい表情で、フミの顔を見る。

フミ「町田先生、本当やさしいわね」

フミが笑って町田を見ている。

町田「フミさんが人生で大切にしていること

を僕も大事にしているんです」

扉付近に立っている我那覇がふと外に

目をやると、廊下に那須輝武（65）

が立っている。人差し指を唇にあてな

がら我那覇の顔を見る。

那須「また来るよ」

小声で我那覇に伝えて、その場を後にする那須。バッグからエコーを取り出してふと外に目をやる町田だが、外を見ている我那覇の視線に気付く。

町田「我那覇さん、どうかした？」

我那覇「いや、なんでもありません」

町田は、我那覇を訝しげな表情で見ることがすぐにフミの方を振り返り、胸の超音波検査を始める。

○前田救命センター・外科病棟個室

ベッドに鈴木健（52）が寝ている。ベッドのそばに立っている鈴木舞（32）、鈴木真由（50）。石原翔（37）が三人を見ながら、化学療法の説明をしている。

石原「この治療法なら、5年生存率を上昇させることができますと考えています。副作用もありませんが、部長のことを主治医として全力で治療していきますので」

自信を浮かべた力強い表情で、石原が鈴木の前に手を差し伸べる。石原の手を握り、二人は握手をかわす。

鈴木「石原、頼むな」

真由「夫をよろしくお願いします」

真由が石原を見て、深く頭を下げる。舞は何か不安そうな表情で石原をみているが、石原と目が合うと軽く頭を下げる。

○有銘宅・居間

町田、五十嵐隼人（28）、山崎香織（55）が、有銘豪（70）に案内されて椅子に座る。有銘豪が申し訳なさらうな表情で三人を見ている。山崎がタバコのポーズをして、豪の方を見る。豪が山崎を見て頷く。

豪「すいません、呼んできますので」

町田「ゆっくりで大丈夫ですよ」

豪が町田と五十嵐の方に向いて、頭を

下げて、ベランダに向かっていく。

○同・ベランダ

有銘清（90）が椅子に座って紙タバコを優雅に吸っている。椅子の横には杖を立てかけてある。鼻には酸素のカーニユールが付いており、横の携帯酸素のボンベに繋がっている。豪が清のそばに現れて、吸っていた紙タバコを取り上げて、灰皿で火を消す。

清「おい、何するんだよ」

豪「父ちゃん、先生来ているから。前言って

いた訪問診療の先生！　いくよ」

清「ああ、お医者さんか」

右手で杖を持って、腰を上げる清。おぼつかない足取りで、ベランダから居間に向かう。豪が携帯酸素を持っている。

○同・居間

居間に杖歩行で入ってくる清。思わず

著名に痩せて酸素カニユーレを付けて
いる清の姿に、釘付けになる町田と五
十嵐。タバコの臭いで咳き込む五十嵐。
五十嵐「すごく痩せていますね」

町田が頷く。

清が町田と五十嵐の方を見てにっこり
笑う。

清「あんたらが、先生か」

町田が清を見て、軽く会釈する。

町田「村井訪問診療所の医師の町田と言いま
す。こちらはアシスタントの五十嵐です、
よろしくお願ひします」

清「よろしくな」

清が町田と五十嵐を見て、軽く頭を下
げる。

○同・居間

清、豪の二人、机を挟んで町田、五十
嵐、山崎の三人が座って話をしている。

町田「有銘さんは、COPD、通称タバコ肺

の影響で通院が難しいんですね」

豪「最初は取り上げたりしていたんですけど、
本人の執念が凄すぎて」

清「タバコはやめん！ やめるくらいなら死
んだほうがまし！」

山崎は呆れた表情で机の上に2、3個
転がっている紙タバコの空の箱を手に
取って、町田の方を見る。

山崎「止める気なんてさらさらないみたいね」

町田は苦笑いで山崎の方を見て、清に
視線をうつす。

町田「有銘さん、タバコをやめたくない気持ち
ちはわかりました。それで良いと思います。
ただ、一つだけ治療について、相談させて
ください」

清「なんだよ、先生？」

町田「有銘さんは重度のタバコ肺とかなりお
瘦せになっているので、具合が悪くなって、
病院に運ばれて、もし人工呼吸器をつけて
しまうと……」

何かを思い出し、一旦発言を止める町田。

(フラッシュ)

石原「人生観を元に治療コードを決めるって、

実は俺たち医者が、患者のその先の人生の

可能性を勝手に摘み取っているだけじゃな

いの？」

山崎が不思議そうな表情で、町田に声

をかける。五十嵐、豪、清も不思議そ

うな顔をしている。

山崎「先生？」

清「人工呼吸がなんだった？」

ハッと我にかえる町田。一呼吸をおい

て話し始める。

町田「すいません。もし人工呼吸器を着けて

しまうと、外れない可能性が高い。有銘さ

んの、大好きなタバコが吸えなくなるかも

しれません」

清「そんなんだったら、生きている意味がな

い」

豪「先生、まあ父ちゃんはこんなに好き勝手に生きてきただけあって、自分がやりたいことができないってのは本当に辛いと思うんで……」

町田「もし、そのような状況になったら主治医として緩和の治療も考えますね」

清「先生、頼むわ」

山崎と五十嵐が頷いて、町田を見ている。

○前田救命センター・外科病棟個室

手に点滴が繋がっている鈴木。点滴台にシリンジポンプが付いており、薬剤が流れている。鈴木は嘔気が襲ってきて、思わず洗面台に吐いてしまう。個室の扉が僅かに開いており、廊下で電子カルテを操作していた大城（40）がきつそうな鈴木の声を聞いて、個室に入ってくる。

大城「鈴木先生、大丈夫ですか？」

横になって洗面台を持って嘔吐している鈴木
の背中をさする大城。一旦落ち着いた鈴木は大城の顔を見る。

鈴木「大丈夫だよ、ありがとう。あと数日乗り切れば……家に帰れる」

○町田宅・居間（夜）

町田がベッドで寝ている。町田のスマホに着信が入る。着信音で目覚めて、眠たそうにスマホを手取る町田。

スマホの画面には「五十嵐」と表示されている。電話に出る町田。

町田「もしもし……五十嵐くん」

五十嵐「町田先生、夜遅くにすみません。今

日オンコール当番でしたよね？」

町田「そうだよ、どうかした？」

五十嵐「有銘さんが……」

寝ぼけている町田の表情が、五十嵐との通話を経て真顔に変わっていく。

○有銘宅・玄関先（夜）

玄関の戸が開いて、中に颯爽と入る町田と五十嵐の二人。

○同・寝室（夜）

息も絶え絶えで汗をびっしょりかいて、ベッドの上に寝ている清。町田がベッド横においてある在宅酸素の機械を見ると、酸素の投与量が大幅に上がっている。

五十嵐が清の酸素飽和度や体温を測定している。

豪「先生、どんな感じですか？ 三日前に出してもらった抗生物質飲み始めてから、落ち着いたと思ったんだが、その後も本人が苦しい苦しいって……」

五十嵐「熱四十度、呼吸数三十回、収縮期血圧80です」

町田「気管支炎じゃなくて、なんらかの敗血

症の可能性があるな……」

町田が曇ったような表情で、清の腕に静脈路を取り、点滴をつなげて流し始める。五十嵐がエコーを町田に渡して原因検索を始めるが、原因が見つからない。清の顔をみる町田。

町田「有銘さん、なんらかのばい菌感染がお体の中で悪さをしていて、病院で原因を調べたり、治療をしてもらうほうが良いかもしれませぬ」

清「先生……に任せる」

辛そうな表情の清。

豪「先生がそうしてくれっていうなら、そうしてくれ」

五十嵐がパソコンで紹介状の下書きをしているのを見て、町田がもう一度、清の顔をみる。

町田「前お話しした通り、人工呼吸器はつけないように、そう病院にも伝えておきます」

清が頷く。町田が立っている豪の方を

振り返る。豪が町田を見て頷く。

○救急車・車内（夜）

町田が点滴バッグを持ちながら、救急車に乗り込み、救急隊員A（28）に点滴を渡す。救急隊員の黒木（30）が血圧を測定している。

町田「訪問診療医の町田です、血圧は？」

黒木「110の60です」

清の指についた酸素飽和度の機械の数値、胸の動きから呼吸数を測る町田。

町田「念の為、このまま同行します」

黒木が町田を見て頷く。

救急車の後ろの扉が開いており、電話をしていた五十嵐が、町田に声をかける。

五十嵐「町田先生、もう一件往診呼ばれています。こっちも発熱と血圧が低そうです」

数秒考えている町田。顔を上げて黒木

を見る。

町田「自宅の時よりバイタルは改善して
います。もう一件の方に行かないといけ
ないの
でこのまま救急隊で搬送をお願いします」

黒木「わかりました」

黒木が町田の目をみて頷く。町田が、
スクラブのポケットから、診療情報提
供書を取り出して、黒木に見せる。

町田「救急外来に着いたら、これを救急外
来の医者に渡してください。大事な書類な
ので」

町田から診療情報提供書を受け取る黒
木。

○前田救命センター・初療室（夜）

初療室の扉が開いて、ストレッチャー
に乗った清が運ばれてくる。新井亮
（29）、高井玲奈（30）、が患者
をベッドに移し替える。

新井「ハイフローとCT室の用意を頼む」

新井が看護師A（24）を見る。看護

師Aが頷いて、初療室の外に出ていく。

新井「血液培養をお願い」

新井が医師A（26）を見る。医師Aが頷いて、清の皮膚を消毒し始める。

黒木が新井に近づく。近付いてくる黒木の姿に新井が気づく。目が合う新井と黒木。

新井「なんかありますか？」

黒木「訪問診療の先生から、これを救急外来の先生に渡してくれてって言われて……」
診療情報提供書を新井に渡す。新井が情報提供書の中身を見て、何回か頷いている。

○同・CT室（夜）

CT室の台の上に寝ている清。遮蔽の防護服を着ている医師Aがモニターを見ながら清の側についている。撮影が始まる。

高井「町田先生、治療方針を決めてくれていたみたいね？」

新井「そうですね。こんなに痩せていて重度のタバコ肺の患者に、人工呼吸器着けたら延命ですよ、さすが先輩です」

CT室にあるパソコンの画面を見ている新井と高井。撮影が終わる。

新井「肺膿瘍か」

新井がCT室のパソコンの画像を指さす。

新井「高井さん、確か今日の当直って外科の石原先生いなかったけ？」

高井「確かそうだったと思うけど」

新井「一応、治療方針を共有しておこうかな」

○同・ステーション（夜）

ステーションの電子カルテで、CT画像を見ている石原。後ろに立っている新井。画像を見終わった石原は、新井の方を振り返る。

石原「救急科の新井先生が考えている治療方

針は？」

新井の表情には自信がみなぎっている。

新井「患者は重度のCOPD、るいそうが著名です」

石原が黙って話を聞いている。

新井「幸い、かかりつけの主治医が人工呼吸器は延命になる可能性が高いと患者、家族と話し合いをしていたので、抗生剤で治療が見込めない場合には、緩和への切り替えも選択肢かと考えています」

石原は電子カルテの横に置いてある診療情報提供書を手に取り、数秒ほど見た後、電子カルテの横に戻す。

高井がステーションに入ってきて新井と石原に声をかける。

高井「ハイフローでも酸素飽和度が下がってきている、意識レベルも悪い。このままだと厳しいかも……」

石原「新井先生、入院中は僕が主治医をする

よ」

新井「ありがとうございます」

石原「挿管してくれないか？」

新井と高井が予想もしていなかった石

原の発言に驚いている。

新井「石原先生、患者は延命処置を望んでい

ない――」

石原が鋭い表情で、新井の発言を遮る。

石原「延命？ 患者さんに回復の見込みがな

いって、人工呼吸器の管が抜けないなんて

誰が百パーセント言い切れるの？」

新井「それは……」

新井の表情が曇る。

石原「主治医は僕だ」

石原が高井の方を見る。

石原「家族には主治医の僕から話すよ」

○同・面談室（夜）

石原、高井、机を挟んで豪が座っている。

石原「お父様は、肺に膿が溜まっていて呼吸の状態が悪いことに加え、重篤な感染症を起こしています。救命のためには人工呼吸器が必要です」

豪「そうなんです。主治医の先生と話していて人工呼吸器は延命になるからやめようと決めています。先生、父ちゃんの苦しみをとってくれませんか？」

石原「お気持ちは理解できますが、息子さんはお父様の人生がここで終わってしまうのと、少しでも人生を長く生きてほしい、どちらを望みますか？」

豪「少しでも人生を長くって、延命ってことですよ？」

石原「延命とは違います。回復して生きていくという意味です。救命のために人工呼吸器を着けて、手術を含めた治療を受けてもらい、人工呼吸器の離脱を目指す」

石原「確かに厳しい戦いかもしれない。でも回復の可能性がゼロでないのなら、やみく

もに諦めるべきではないと思います」

豪の表情が揺らいでいる。

石原「主治医の先生のお話だと、ここでお父様の人生が終わってしまったのですが、またお父様との時間を過ごしたいと思いませんか？」

豪「そうですね……」

豪が頷いている。横にいる高井が黙って石原の話を聞いている。

○同・初療室

新井が準備した挿管の物品をなんとも言えない表情で眺めている。初療室に入ってくる石原と豪。豪がベッドに寝ている清の元に駆け寄る。新井の方をみる石原。

石原「新井先生、家族さんも挿管を望んでいる」

豪「父ちゃん、頑張ろうな」

意識が混濁しはじめている清の手を強

く握っている豪。

○町田宅・居間（朝）

起床する町田。若干疲れた表情を浮かべている。横に置いてあるスマホの電源が切れており、再起動するが画面が真っ暗の状態。町田はうんざりした表情を浮かべる。

○村井訪問診療所・オフィス（夕）

診療所の子機を耳に当てながら、曇った表情で電話をしている町田。手元にある自身のスマホを見つめている。

町田「いまから伺いたいんですが……」

皆川（40）（声）「大変申し訳ございません、本日予約で一杯です……明日のこの時間帯なら空いておりますがいかがでしょうか？」

町田「明日ですか？　ちょっと確認しますね」

町田がデスクの上のパソコンで、明日

の訪問スケジュールを確認している。
曇っていた町田の表情に明るさが戻る。

町田「明日いけそうです」

○前田救命センター・正面玄関

正面玄関に立っている鈴木健、真由の

二人。二人と向かい合っている石原。

若干顔が瘦けている鈴木。

石原「部長、大変だったと思いますが、よく

耐えてくださったと思います」

鈴木「こんなにしんどいとはな、想像よりも

辛かったよ」

石原の肩を叩く鈴木。若干申し訳なき

そうな表情で、鈴木を見て軽く会釈す

る石原。

石原「部長が長く生きていけるように、僕は

これからも全力で治療を続けていきます」

真由「よろしく願います」

真由が石原に頭を下げる。

○携帯ショップ・店内（夕）

町田が皆川からスマホを受け取っている。町田がスマホの電源を入れて、画面が立ち上がったのを見て、安心して表情を浮かべる。

町田「よかったです、すぐ直って」

皆川「原因はバッテリーの劣化みたいです。

充電のし過ぎなどに注意して頂けたら」

町田「ありがとうございます」

町田は皆川の顔をみて、軽く頭を下げてから店の出入り口に向かう。町田の後ろ姿を見送る皆川。

○同・駐車場（夕）

町田の視界に、停めている車の運転席に座って、車のエンジンをかけている運転手（55）が映る。なかなかエンジンがかからず、首を傾げて車外へ出てくる。ボンネットを開けてバッテリーをチェックしている。町田がふと電

源の入ったスマホに視線を移すと、多数の電話やラインの着信履歴が表示されている。

電話履歴を見ると、「新井」の表示が何件かある。新井に電話を掛ける町田。

町田「もしもし、新井？　なんかあった？」

新井（声）「先輩、遅いっすよ」

町田「ごめん、スマホ壊れちゃって」

新井（声）「先輩が一昨日の夜送ってきた患者さんがいるじゃないですか？」

町田「有銘さんでしょ？　今どんな状態かわかる？」

新井（声）「それが――」

町田「え……」

呆然とした表情で新井の電話の話を聞いている町田。

○前田救命救急センター・集中治療室前（夕）

町田が立っている。

町田のそばに立っている光浦（35）

が誰かと電話をしている。

光浦「主治医から、許可が出たので」

光浦は、集中治療室前のドアを開けて、中に町田を案内する。

○同・集中治療室（夕）

光浦「失礼します」

光浦が集中治療室のカーテンを開ける。中では鼻に酸素カニューレがついた清がベッドの上に座っており、豪と楽しそうに話している。清の胸には胸腔ドレーンが挿入されている。町田がその光景を驚きの表情で見ている。町田に気づく清と豪。

清「おお、先生」

豪「町田先生、きてくれたんだ」

気まずそうな表情で、清と豪を見て軽く会釈する町田。町田の後ろから、石原が歩いてやってくる。

石原「明日にはドレーンも抜けて、今週末に

は家に帰れるんじゃないかな」

清と豪が、石原の姿に気付く。

清「先生は、本命の恩人だよ」

豪「先生があの時、治療してくれてなかったら父ちゃんはもうこの世にいない」

清と豪が敬服した表情で、石原の顔を見ている。清が石原の手を握って拝んでいる姿を、なんとも言えない表情で見ている町田。

（回想はじめ 14年前）○体育館・フロア
町田と石原の試合。得点板の表示は、
『8 | 6』、『12 | 6』と移り変わり石原のリードが広がっていく。

（回想終わり）

○集中治療室・廊下（夕）

なんとも言えない表情で立っている町田に、壁にもたれかかっている石原が声をかける。

石原「なあ、町田」

町田が石原に視線を向ける。

石原「人生観や思いで医療を決めていたら、

有銘さんはもうこの世にはいない」

石原「こう言ったら悪いが、治療コードを決めるってというのは、救急医にとっての免罪符にしか見えないんだ」

町田の肩を叩いて、去っていく石原。

○鈴木宅・外観

T「一ヶ月後」

○鈴木宅・居間

C Vポットが埋め込まれ、一ヶ月前より更に痩せた鈴木が気だるそうな表情で椅子に座っている。机の上の体温計を手に取って腋に挟む鈴木。心配そうな表情で見ている真由、舞の二人。

○前田救命センター・外来診察室

鈴木、真由、舞の三人が座っている。

石原が電子カルテ上の鈴木健の血液検査を見ている。

鈴木「石原、どうだ？」

石原「部長、入院の必要があるかと思いますが、
す。おそらく治療の副作用と思いますが、
白血球が相当下がってきています」

真由「入院って、つい二週間前もー」

鈴木が真由の顔の前で、手を挙げて真由の発言を制する。

鈴木「石原がそう思うなら、そうしてくれ」

石原「わかりました」

鈴木「なあ石原。今の治療続けて、僕が五年後生きている確率はどのくらいだと思う？」

鈴木が石原の目を見る。少しためらいの表情を浮かべている石原に鈴木が頷く。

石原「五パーセント弱です」

真由が絶望的な表情をしている。
舞が鈴木顔を見る。

舞「お父さん、本当に今の治療頑張れそうなの？」

電子カルテで入院の手続きを進めていた石原の手が止まる。石原の目に若干の怒りが灯っている。

鈴木「舞、主治医の前でそういうことを言うのはやめなさい。まだまだ頑張ろうと思っし、石原は少ない可能性に賭けようとしてるんだ」

真由「入院期間はどのくらいになりそうですか？」

石原「今回の場合、白血球の数値が回復してくるのを確認しないといけないので、大体三〜五日ほどかと思います」

舞が黙って聞いている。

○岡本宅・居間

町田、五十嵐、山崎が座っている。

町田が覇気のない表情で、正面に座っている岡本吾郎（85）、岡本五倫

(55)に急変時の方針を確認している。

町田「岡本さんの場合、年齢も年齢ですが、具合が悪くなったとして、病院で治療をすれば、回復の見込みはゼロではありません」

町田の面談の方向性に違和感の表情を浮かべている山崎、五十嵐の二人。

岡本「まあでも先生、親父は延命とか、きついことはしたくないって」

町田「もちろん、そのお考えはごもっともだとは思いますが、きつい治療を頑張って、回復して元の生活に戻る人だっているんです」

岡本「そうですね……」

心配そうな表情を浮かべている山崎、五十嵐の二人。

○同・玄関先

玄関の扉を背に、車へ向かって歩き出す町田。

山崎「先生」

五十嵐「町田先生」

町田に山崎、五十嵐が声をかけるが声が重なってしまふ。顔を見合わせて若干気まずそうな表情を浮かべる五十嵐、

山崎の二人。

山崎「最近どうしたのよ？」

五十嵐「最近らしくないですよ。前まであんなに人生観や思いを聞いていたのに」

町田「最近思っただんです。人生観や思いで治療方針を決めちゃいけないって。実際有銘さんは助かっている」

山崎と五十嵐がなんとも言えない表情で、後部座席の扉を開けて車に乗り込む町田の姿を見ている。

○前田救命センター・外科病棟個室

T「入院七日目」

鈴木が寝ている。鼻に酸素のカニユーレが、CVポートには静脈栄養剤がつ

ながっている。腹水穿刺の処置を終えて立ち上がる石原。舞が石原の処置を見ている。

鈴木「石原、退院の目処は立ちそうか？」

石原「白血球は回復しましたが、栄養と腹水のコントロールに難渋していて、もうしばらくかかりそうです」

申し訳なさそうな表情で頭を下げて、部屋から出ていく石原。舞は鈴木が自宅から持ってきた写真が増えていることや、ベッド周りのレイアウトが日に日に家に近くなっていることに気付き、

鈴木を見る。

舞「お父さん、本当は今の治療辛くて家に帰りたいんじゃないの？」

鈴木「石原は……精一杯治療してくれているんだ」

舞「お父さんに会わせたい人がいるの」

舞の目の奥に宿る強い意志を感じ取る

鈴木。

○同・病棟廊下

舞が廊下の壁に少しもたれながら立っている。石原の姿を見かける。

舞「石原先生」

舞の方を振り返る石原。

石原「鈴木、どうした？」

舞「ひとつ、石原先生にお願いがあって……多職種カンファレンスを開いてほしいんです」

T「多職種カンファレンス…多職種が集まってそれぞれの分野の観点から意見を出し合い、患者の現状や治療方針について話し合う会議」

石原「どうして？」

舞「石原先生が全力で治療してくれるのはわかります、ただ多職種からみたらもしかしたら違う治療もあるんじゃないかと……」

石原「違う治療ね……。鈴木、本音を言ったらどうなんだ？」

舞「どういう意味ですか？」

石原「看取りも含めて在宅医療へ切り替えてほしいんだろ？」

舞が凶星を突かれたような表情をしている。

石原「多職種カンファレンスは開くよ。でも僕は今の治療方針を変えるつもりはない」

舞が去っていく石原に声をかける。

舞「翔先輩はサークルの時から、攻めの姿勢でかつこよかったです。でも攻め続けても勝てない時があるのを翔先輩は知っていますよね？」

立ち去ろうとしていた石原の後ろ姿が一瞬止まる。舞の発言を鼻で笑って、そのまま立ち去る。

○町田宅・居間（夕）

町田がスマホを見ながら、ビール缶を飲んでいる。机の上には2、3個空き缶が置いてあり、部屋が散らかっている。

る。町田のスマホに着信が入る。「鈴木舞」の表示がされている。電話に出る町田。

町田「もしもし、どうした？」

舞（声）「町田先生、お願いがあるんだけど」

町田「お願い？」

舞（声）「父が入院しているんだけど、訪問診療医として会ってほしいの」

町田「鈴木部長の？ えっ、どういうこと？」

混乱した表情と声色の町田。

舞（声）「詳しくは言えない。診療のこともあるから、日程はなんとか調整する」

町田「なんで俺？」

舞（声）「最近だと金城さんのお父さんや他の患者さんの時もそうだったけど、町田先生の医療って患者さんの人生観や思いを大事にするなって……」

町田「鈴木……最近そういうの、俺できていないと思うんだ」

舞（声）「え、どうして？」

町田「鈴木。俺には力になれないと思う……
ごめんね」

舞（声）「町田先生、患者さんの幸せを一緒に考えてほしいの、お願い……」

散らかっている部屋の床に置いている
サークル時代の色紙を拾い、舞の書いた
タッセージを読む町田。迷っている
表情を浮かべている。

○村井訪問診療所・オフィス

村井正和（50）が自身のデスクの椅子に座っている。村井の前に立っている町田。

村井「鈴木さんから？」

町田「はい。この時間帯を空けられないですかね？」

下を向いて十秒ほど考えている村井。
町田の目の奥に固い意志を感じる。

村井「わかった。この時間帯の先生の定期的な患者、俺が回っておくよ」

村井「その代わり、訪問診療医の町田先生と
してできることをしてきてね」

町田「ありがとうございます」

村井に向かって頭を下げる町田。

○前田救命センター・外科病棟個室（夕）

舞が部屋の扉を開けて、入ってくる。

舞の方を見る鈴木。

舞「お父さん、連れてきたよ」

町田が恐る恐る、部屋の中に入ってくる。鈴木と町田が目線を合わせるが、二人とも若干気まずそうな表情をしている。

町田「お久しぶりです」

鈴木「久しぶりだな」

苦笑いの表情の舞が鈴木の耳元で囁く。

舞「病気のことはもちろん言っていない」

町田が舞に促されて、個室内のソファ
に座る。

鈴木「町田先生、職場を移ってからどうな

の？」

町田「まあまあですね。いろいろと勉強することも多くて、大変です」

数秒ほどの沈黙が部屋に流れる。

町田「鈴木先生が入院していたなんて、驚きでした」

鈴木「まあいろいろあってな」

町田「入院生活って大変ですよ？　僕も一回入院したことがあるんですけど、たった二、三日で心が折れそうで」

鈴木が共感の意を示す町田の表情を見て、堅かった表情を少し緩める。

鈴木「本当大変だよ」

町田「ですよね……」

町田が入院台や机の上に置いてある登山の風景や釣った魚、家族との写真を見ている。

町田「鈴木先生って、多趣味なんですよ」

鈴木「まあ若手の時は、結構幅広くやっていたよ」

軽く笑っている鈴木。町田が山の外観が写っている写真を手に取る。

町田「この山って、なんでしたっけ？ 何かの写真で見覚えはあるんですけど」

鈴木「キリマンジャロだ」

鈴木「登るのは相当大変だったよ」

町田「登ったんですか？ すごいですね」

他にも釣りや家族との思い出の雑談で盛り上がっている町田と鈴木。

町田「鈴木先生の生きがたって、アウトドアや家族と過ごすこと、なんですね」

町田が鈴木を見て、にっこり笑う。鈴木も笑い返すが表情が引き攣っている。

町田が鈴木表情に違和感を感じる。

町田「鈴木先生、最近気がかりなことって何かありますか？」

町田が机の上に置いてある鈴木宅で撮影した家族写真を見ている。

暫く黙っていた鈴木が一呼吸置く。

鈴木「町田先生、俺はステージIVの膵臓がん

で化学療法中なんだ」

鈴木「家族との時間を長く過ごせるようにと
思って治療をしている……。ただ効果がな
く、このまま衰弱して寝たきりになるのな
ら今の治療を止めて、自宅へ退院したい」

鈴木の目に強い意志を感じる町田。

○同・カンファレンス室入口（夕）

カンファレンス室にケアマネの青山
（40）、リハ担当の木田（40）が
入ってくる。カンファレンス室入口に
町田と舞が現れる。石原も現れるが、
町田と舞の姿を見て、やや不機嫌そう
な表情を浮かべる。

石原「多職種カンファレンスって、院内のス
タッフやケアマネでやるものだと思ってい
ただけど？」

鈴木「すいません」

石原「病気のこととは？」

鈴木「父から町田先生にも伝えていきます」

石原「本人の許可は？」

鈴木「とってあります」

石原「そうか：：せっかく来たんだし、今回は参加していいよ」

石原は町田の肩を優しく叩く。

○同・カンファレンス室

石原、病棟看護師の大城、木田、青山、町田、舞が座っている。

石原「鈴木さんは、ステージⅣの膵臓癌で2クール目の抗がん剤治療が終了したところ。腫瘍の影響と考えられる胸腹水の貯留があり、体液管理および中心静脈による栄養管理を行なっています」

石原「知っての通り、5年生存率は極めて低い腫瘍ですが、主治医として抗がん剤の治療を続けて、できるだけ鈴木さんの生存期間を延ばしたいと考えています」

大城「鈴木さんはー」

カンファレンスで多職種間のやりとり

が続いている。会話が一旦終わる。

石原が町田の方を見る。

石原「訪問診療医の町田先生は何か意見はあるの？」

町田が一呼吸置いて、話し始める。

町田「鈴木さんは、抗がん剤の治療で少しでも家族と過ごす時間を延ばしたい。でもこのまま効果がなく衰弱、寝たきりになって今の治療を続けるのは受け入れられない、それならば自宅に退院したいと」

町田「鈴木さんの生きがいはアウトドアと家族との時間です」

石原が黙って町田の話を聞いている。

町田「舞さんから、鈴木さんが徐々に弱ってきていると聞きました。治療の効果が乏しいと判断するなら……」

舞「今の父なら、まだできることもありますし、在宅調整を考えてもいいんじゃないでしょうか？」

石原「衰弱しないように、必死に栄養管理を

していて、今は、抗がん剤の治療効果の判定を待っている。在宅ではできない」

石原「主治医として、僅かの可能性に期待して、本人により長い人生を歩んで欲しいと思うのは間違いなの？」

石原が鋭い表情で町田、舞を見て、木田に目配せをする。

木田「鈴木さんのA D L低下は確かにありますが、治療をする上でリハが全力で維持しています」

書類をめくっている青山。

青山「行く行くは在宅調整が必要かもしれませんが、主治医の先生が、今は治療中と仰っていますし……」

石原「町田先生、他の職種も今は鈴木さんの治療のために協力してくれている」

一呼吸を置いて、町田と舞の方を見る鈴木。

石原「言葉は悪いけど、鈴木さんが看取りを希望しているの？」

町田「……そうは言っていません」

石原「僕は可能性がゼロじゃない限り、医療でお父さんの人生を決めてあげたい。衰弱や寝たきりなんて、今は誰もわからない」

石原が舞を見ている。

町田が黙って、石原の話を聞いている。

○同・カンファレンス室入口（夜）

町田と石原が向かい合っている。

石原「今回は特別に参加して貰ったが、町田はこの病院の職員でもないし、本来であれば、このカンファレンスの参加者ではない」

町田が黙って聞いている。

石原「町田、部長の治療方針に今後関わるのは遠慮してくれないか？」

石原が町田の肩を叩いて去っていく。

（回想はじめ 14年前）○体育館・フロア

町田と石原の試合。得点板の表示が、

『2018』から『2118』へと変

わり、石原側の得点板に一ゲームを取

得した事を示す『1』の表示がされる。

(回想終わり)

○村井訪問診療所・オフィス(夜)

町田が村井のデスクの前に立っている。

村井が座って町田の話を聞いている。

町田「患者の人生観や思いを聞いても、結局治療方針には影響しなかったです」

村井が数秒考えている。

村井「まあ、それはそうだと思う」

町田「どういう意味ですか？」

村井「町田先生が糖尿病専門の主治医として血糖コントロール中に、患者が甘いものが好きだから食べたいと言ったら、許すと思う？」

町田「許さないと思います」

村井「主治医の先生は、患者が抱えている病気の治療ために全力を尽くしている」

村井が一旦下を向き、一呼吸置いてから町田の顔を見る。

村井「でもね、町田先生。患者の人生で医療を決めなきゃいけない時は必ず来る」

村井の話聞いてるが、何か腑に落ちない表情の町田。

○有料老人ホーム花・個室（夜）

冷や汗をかいて苦しそうな表情で寝ている木村。手には点滴が流れている。エコーを胸にあてている町田の表情が変わる。我那覇が心配そうな表情でみている。

町田「これは……」

立ち上がって我那覇の方を向く町田。

町田「我那覇さん、木村さんは急性大動脈解離の可能性が高い。鎮痛や降圧が必要で、救急車の手配をお願いします」

我那覇が頷き、個室の入り口に向かうが、扉の前に立っている那須に気付き

足を止める。薬剤を投与している町田に、那須が声をかける。

那須「町田先生の考えている治療方針、僕に教えてもらえないかな？」

町田が那須の顔を見て、驚いた表情をしている。

（最終話「Cure to Care」に続く）